

原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ  
「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第1回外部評価委員会  
逐語録

(木村) それでは、平成26年度の第1回外部評価委員会を始めたいと思います。

まず、資料の確認をいたします。資料に番号を振っていきますので、よろしくお願ひします。一番上に議事次第があります。1-0でお願ひします。次が、業務計画書(一部抜粋)です。1-1でお願ひします。次に、今年度のメンバー一覧を示させていただきます。1-2でお願ひします。次に、同じく業務計画書なのですが、こちらは今年度の進捗状況を示したものです。1-3でお願ひします。次に、「原子力と社会」研究ワークショップのパワーポイント資料があります。1-4でお願ひします。そして、フォーラム全体振り返り資料という分厚い資料があります。1-5でお願ひします。次に、「フォーラムに関する説明書『フォーラム』が目指すもの」というパワーポイント資料があります。こちらは、第1回フォーラムのときに、参加者の皆さんに対する説明資料として用意したものです。1-6でお願ひします。次は、これもそのときに配った資料ですが、フォーラムの目的、ルール、ブレンストーミングについての説明資料です。1-7でお願ひします。次に、青い紙のセットがあると思います。こちらはグループワークの進め方の説明資料になります。1-8でお願ひします。次に、シンポジウムの案があります。1-9でお願ひします。それから、今年度の経費の使用状況の資料が1枚ついています。1-10でお願ひします。

また、今までに行った2回の業務推進全体会合の議事要旨案、第1回から第9回のフォーラム研究会の議事要旨案がついています。これは参考資料としておつけしています。ここまでよろしいでしょうか？

それから、今年度になって、ようやく書き物や論文がいくつか出てきておりますので、そちらをおつけしております。土田先生の書かれた解説文と、研究スタッフの篠田さんが書いた論文と、私が書いたものが2編、添付されていると思います。資料は以上です。よろしいでしょうか？

本日は、今年度行う業務の内容についてご説明して、進捗状況のご説明をした後に、自由にディスカッションをしていただければと思います。よろしくお願ひします。

## 1. 平成26年度業務の概要について

(木村) まず、今年度の業務の概要について、簡単にご説明したいと思います。資料1-1をご覧ください。

題目は、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」ということで、3年度目ということになります。最終年度です。

業務の目的。一応読み上げたいと思います。市民と専門家に対する社会調査をベースとしたコミュニケーション・フィールド（「フォーラム」と呼ぶ）を構築し、参加者への意識調査から、フォーラム参加によるダイナミックな意識・態度・信頼の変容を明らかにするとともに、「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの枠組みおよび要件を見出すことを目的とする、ということです。

1回目の社会調査を実施し、第1期のフォーラムを行って、第2期のフォーラムの準備を始め、2回目の社会調査を実施したところで昨年度の事業を終了しております。

今年度は何をするかというと、まず、(1)フォーラム（第2期）の準備と試行を行います。平成25年度に実施したフォーラムを改善し、平成26年度上期に複数回のフォーラム（第2期）について準備し、実施する。フォーラム準備段階の研究者等会合、及び、フォーラムで話し合われたことを記録し、ホームページで公開する、ということになっています。

(2)フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定。こちらは再委託先の原子力学会が実施する項目で、リーダーが土田先生ということになります。各回のフォーラムにおいて、アンケート調査を実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を測定し、フォーラムの効果を定量的に明らかにする、ということになります。

(3)フォーラムの効果検証とシステム化の検討。こちらは2つの項目があります。

①インタビューとフォーラム記録による効果検証。全フォーラム終了後、参加者にインタビューを実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を定性的に明らかにする。フォーラム記録と併せて分析し、参加者に感じられたフォーラムの効果がいかなるダイナミズムと関係していたかを明らかにする。また、「原子カムラ」の境界を越えられたかどうかという観点、及び、フォーラムのシステム化の観点から、フォーラムの効果検証を行う。

②フォーラムのシステム化の検討。「原子カムラ」の境界を越えるためのポイントとフォーラムシステム化のポイント、及び、(1)で検証した結果を整理し、フォーラムのシステム化について検討する。フォーラムのシステム化を行い、様々なところにフォーラムというものを展開させようということで、この研究計画を作っているということになります。

以上が文科省との契約の業務で、現在粛々に行っているということになります。

資料1-2は、今年度のメンバー一覧になっています。基本的には昨年度のメンバーと変更はありません。変更点としては、フォーラム研究会グループに、昨年度（第1期）のフォーラム参加者の方に入っただき、フォーラムの運営に携わっていただいたということです。その方が第1期フォーラムのときに感じたことなどを反映しながら、今回のフォーラムの運用をしていったということです。

また、昨年度までは森田先生に外部評価委員会に入っていたいただいていたけれども、森田先生は非常にお忙しくなってしまうと、今年度は委員から外れることになりました。その代わりに、シンポジウムのパネリストとして加わっていただくことになりました。後ほど報告しますが、12月20日にシンポジウムを計画しています。こちらのパネリストとしてお招きして、外部評価委員という形ではないですが、この研究に対するコメントをいただくようなスタイルを用意しましたので、そういう形で森田先生にも関わっていただくことになりました。

以上が今年度の研究計画になります。

## 2. 進捗状況の報告

(木村) 続いて、現状どこまで進んでいるのかについて、ご報告したいと思います。資料1-3をご覧ください。

(1) フォーラム(第2期)の準備と施行に関しては、達成度90%と書かせていただいています。市民9名・専門家9名(8名)にて、5回のフォーラムを実施、と書いてあります。カッコ8名というのは、専門家9名をこちらでお願いしたのですが、1名がずっと欠席されていたということで、実質8名になってしまったということです。

(安部) どういう方を専門家と呼んでいるのですか？

(木村) 原子力学会員です。昨年度と同じく、学会員に対して社会調査を実施するとき、フォーラムの応募用紙を同封して、応募してきた方の中から、何を専門とされているのか、どのような業種であるのかということを考慮しながら選択したということになります。

(安部) 技術系、工学系の方が多いのですか？

(木村) 工学系の方もいらっしゃいますし、事務系の方もいらっしゃいました。あとは、社会的な話をされている方もいらっしゃるということで、様々な分野からピックアップしました。ですが、残念ながら1名の方はいらっしゃらず、結局8名になってしまったということです。

昨年度と同様に、5月の最終土曜日から隔週の土曜日ということで、7月末までに5回のフォーラムを実施しています。フォーラムの記録はすでに公開済みです。また、現在、フォーラム研究会や業務推進全体会合の議事録について最終調整をしていて、これから速やかにウェブ上に公開しようという状況にあって、この項目は近いうちに100%に到達する予

定です。

(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定に関しては、達成度 50%と書かせていただいております。フォーラムの始まる前と終わった後に、詳細なアンケートを 2 回実施。また、フォーラム各回にも簡易アンケートを実施して、計 7 つのアンケートを実施しています。こちらは、現在土田先生に分析していただいているということになります。

次に、(3) フォーラムの効果検証とシステム化の検討の、①インタビューとフォーラム記録による効果検証というところですが、達成度は 50%になります。フォーラム終了後、参加者 17 名について、インタビューを実施しました。現在、分析中ということで、まだ成果としてまとまっていませんけれども、どういう印象だったかは後ほど紹介できると思います。

②フォーラムのシステム化の検討に関しては、達成度 30%と書かせていただいております。フォーラム終了後、フォーラム研究会を 2 回実施しています。フォーラムのシステム化について、その中で討議して、現在整理中ということです。こちら、資料 1-4 の中で少しご説明できるかと思えます。

(4) 研究推進に関しては、順調に実施されています。業務推進全体会合は 2 回実施済み、第 3 回、第 4 回を実施予定。第 3 回は、11 月中旬くらいで分析を一通り済まそうと計画していますので、その討議をするということ。第 4 回は、3 年度分の研究のまとめをする予定です。

フォーラム研究会は 9 回実施済みです。フォーラム実施の運営委員会でもあったので、フォーラムが隔週であったわけですけれども、その間にフォーラム研究会を開いて、反省と次回の計画をする、というようなスケジュールで行っていました。フォーラム終了後も、システム化についての検討を 2 回実施しているということになります。今後は、12 月頃、翌年の 2 月頃に 2 回ほど実施する予定です。

外部評価委員会は、本日が第 1 回、第 2 回は、最後に日程の調整をさせていただければと思いますが、翌年 3 月に実施予定です。

また、シンポジウムを 12 月 20 日に実施予定です。詳細は試料 1-9 にございますけれども、その場でいただいた課題をさらに検討できるくらいの余裕を持ったタイミングで実施したいということで、12 月に実施します。

それでは、裏面を見ていただければと思います。今年度は、解説文や論文が出てきましたので、ここに示してあります。これが本日参考資料として皆様にお配りしているものです。

その他に、いろいろなところから発表の依頼が来つつあって、例えば、資源エネルギー庁の早朝勉強会に呼ばれたりしています。あとは、NHK でも研究内容が放映されました。

また、今年度は、原子力学会の発表の他に、PBNC2014（環太平洋原子力会議）で 2 件の発表をしています。1 件目は、Nuclear Power Village ということで、原子カムラというものが新聞でどう扱われているかについて、これは初年度にやった分析ですけれども、海

外でお話ししてきました。

(安部) Nuclear Power Village で伝わるのですか？

(木村) いろいろ調べたのですが、ニューヨークタイムズなどで、Nuclear Power Village という単語が使われているのです。

(安部) それは、日本語の「原子カムラ」と同じような意味合いなのですか？

(木村) なんとなく雰囲気は通じるようです。ただ、「そういう業界はありますよね」というイメージでの質問が多くて、我々は外からどう見えるのかという「境界」に着目しているのです、というような答弁は、日本でもあったのですけれども、海外でも同じようにあって、まあこれは仕方がないのかなと思います。

PBNC での 2 件目の発表は、フォーラムの取り組みということで、第 1 期のフォーラムのまとめを中心にして、PBNC は 8 月末だったので、第 2 期の結果も少し加えた形で発表してきました。こちらも、なかなか面白い取り組みだというコメントがあった一方で、海外においても、原子力分野ではやはり専門家が市民に情報を伝えるのが主流である、という意見もありました。さらに、日本が今どのような社会状況なのかがほとんど伝わっていないということが分かりまして、なぜ日本でこういう取り組みが必要なのか、ということを理解してもらうのが難しかったです。そういう意味では、土田先生に間に入っていたいて、社会調査の結果を話してもらおうと、いい感じの一連の発表にできたのではないかと思います。

(土田) ちょうどサバティカル中で、アメリカにはいたのですが。

(木村) 今回こういうことがあって、やはり世界に対してこういう研究なり、社会調査の結果を発信していかなければいけないと強く思いました。それは海外発表をしてよかったなと思ったところですね。

また、原子力学会の発表ですが、土田先生の代わりに私が社会調査の結果をお話ししたのですが、こちらかなり白熱したディスカッションができました。その中でも、今回発表した社会調査の話だけではなくて、フォーラムはどうなっているのか、というような話もいただきまして、本体のほうの成果発表を望むようなコメントもいただいていますので、なかなかいいなと思っています。

次回の、原子力学会の春の年会では、1 セッションを企画しています。丸々 1 時間半を使って、一般公開でやる予定です。

(松田) 聞きに行きたいです。日時が決まったら教えてください。

(木村) 分かりました。

進捗状況の概要は以上ですが、ここまでで確認事項やご質問はありますか？

(松田) 今後の成果発表のところに関連があると思うのですが、高レベル廃棄物の検討の委員会が始まりましたよね。その中で、市民がどのようにこの問題を理解していくか、ということ委員の方々に有識者が話題提供しています。このプロジェクトのことをぜひ発表してもらいたいと思っているのです。

この前は、新潟県の新野さんがお話をなさって、先回は、崎田さんが、高レベル廃棄物の勉強会の全国行脚の話をしたのだそうです。木村先生にお話してもらったほうが良いと彼女が言っていましたから。

(木村) そうですか。では、ぜひ推してくださいとお伝えください。

(松田) 分かりました。崎田さんにそう言うておきます。委員会は始まったばかりで、市民と原子力とコミュニケーションという話になっているみたいです。

(木村) そうですか。ありがとうございます。

(定松) 確認ですが、フォーラムの市民9名、専門家9名というのは、第1期に参加していない方をお願いしているのですよね？

(木村) そうです。

(定松) 第1期は複数のグループを走らせていましたけれども、今回は1グループということですか？

(木村) それに関しては、資料1-4を見ていただくといいかもしれません。スライド9です。昨年度は、市民10名、専門家10名でした。フォーラムは、3グループでのグループワークが中心だったのですが、10人を3つに分けると、4人、3人、3人になりますよね。そうすると、専門家が多いとか、市民が少ないということになってしまうので、今回はグループ内の人数もそろえるために、9名ずつにしました。市民3人、専門家3人の6人のグループを3つ作るというスタイルにしています。今年度もそこは変わりません。

(定松) 分かりました。

(木村) 他はよろしいでしょうか？

それでは、フォーラムの中身についてお話ししたいと思います。1-4をご覧ください。

1-4は、このイニシアティブのグループの人たちが横でつながろうということで、イニシアティブの「原子力と社会」グループのプログラムオフィサーの岩田先生が企画した、「原子力と社会」研究ワークショップで話してきた内容になります。第2期フォーラムの進捗と、あと半年でどこに着地するのかについてのビジョンをお話ししてきました。

(スライド2) 概要に関しては、すでにお話ししていますが、復習のために、フォーラムというものがどういうコンセプトで作られているのかを確認したいと思います。

1. 市民（首都圏住民 500 名規模）と専門家（原子力学会員 500 名規模）に対する社会調査を実施し、
2. これをベースとしたコミュニケーション・フィールド（原子力に対する賛否、安全性に関する考え方を考慮して、原子力に対する考え方のバランスが取れるように、一般市民および専門家から 10 名程度ずつを選出して「フォーラム」とする）を構築し、
3. フォーラムを実施する。
4. フォーラム参加者への継続的な調査を実施し、市民はもちろん、専門家側の意見形成（意見変容）プロセスをも同時に見ることができ、コミュニケーションによる市民と専門家の相互作用をダイナミックに捉える。
5. これを2サイクル実施することにより、より実践的な方法を開発する。

このためにフォーラムが実施されているということになります。

(スライド3) 第1期フォーラムを受けて、第2期フォーラムが目指すものを、かなりシンプルにまとめました。そして、第1回フォーラムの最初に参加者の皆さんにこれを紹介し、さらに、忘れないようにくどいように毎回話すようにしました。あくまでも市民と専門家がコミュニケーションできるようになることを目指すのですよ、ということを徹底して、今回のフォーラムを実施したということになります。

仮説としては、「お互いが何らかの思い込みをして、お互いの考え方にギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないか」。それに対して、「『フォーラム』での対話を通じて、市民と専門家が、お互いを尊重し、コミュニケーションできるようになることを目指す」と明確に話した、ということになります。

第1期フォーラムでも、最初にこのこととお話ししたつもりだったのですが、第1回終了時のアンケートに「目的が分からない」というご意見が出ていて、第2回の冒頭でもう1回時間を使って説明したという反省を踏まえて、第2期では、かなり明確な目的を立て、それを伝えることを徹底しています。

(スライド 4) 今回は、フォーラムのシステム化ということで、「市民と専門家がお互いを尊重し、コミュニケーションする」という目的を達成するためには、フォーラムはどんな要件を持たなければいけないのかを整理しています。その要件を、スライド 4 と 5 にまとめてあります。

まず、スライド 4 に書いてある 5 つのポイントは、コミュニケーションという観点から書かせていただいたポイントになります。大きくは 2 段階に分けられます。まず、「お互いに理解し、尊重する」という段階。そして、「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」という段階です。

「お互いに理解し、尊重する」の中には、「お互いが異なることを知る」という段階、「共通点を知る」という段階、「異なることをあるがままに受け入れる」という段階があります。

また、「お互いが変わろうとして、コミュニケーションする」に関しては、「自分が変わってもよいと思う」ということと、「相手が変わろうとしていることを知る」というポイントがあって、これらが達成されると、コミュニケーションもうまくいくのではないかと示しています。

これらのポイントを作るにあたって、既往のコミュニケーションの研究もいろいろ見たのですが、なかなかこのようなまとめは見当たらず、唯一、元東北大学の北村先生、大阪大学の八木絵香さんが一緒にやっていたプロジェクトの中で、同じようなプロセスがあったということが書かれていました。あとは、第 1 期フォーラムの分析の中で出てきた論点がまさにこれに当てはまっていたということで、それらを総合して、コミュニケーションのステップとして提示させていただいたということになります。

(スライド 5) 次は、フォーラムというものが実際に成立するための要件になります。

1 つ目は、「参加者にコミット感を持ってもらう」ということです。このフォーラムに自分が参加している、という意識を持ってもらうために必要だと考えられる要件は、参加者の中で「お互いが対等である」という認識を持つことではないか。誰かが突出していたり、えこひいきされたりしていると、それ以外の人たちは引いてしまって、コミット感がなくなるのではないか。あとは、「お互いが尊重されていると認識する」ことが大切なのではないか。参加者間での対等感、尊重感が大切なのではないかということで、ポイントを出しています。

また、参加者から運営側が信頼されないと、そもそもフォーラムに参加していただけないので、信頼を得るためにということで、3 つの要件を挙げています。「運営能力への信頼」、「話題が誘導されない」と感じる、あとは「参加者への扱いが公平である」と感じさせることを要件として入れています。

(スライド 6) このスライドは、少し絵が小さいですが、スライド 4、5 の要件のまとめになります。これがシステム化のひとつの方向性かなと思って、書かせていただいています。

す。

全部で10個のポイントがありましたけれども、それが表の横軸に並んでいます。

縦軸は、実際にフォーラムを行う際に気をつけるべき要素です。例えば、「フォーラムの設計」においては、参加者選定、場の設定、オリエンテーションや導入、自己紹介、話題設定、グループワーク、全体共有、記録などの要素が並んでいます。また、全体に通じるような要素として、「対話」や「対話ルール」、「ファシリテーター」などの要素もあります。また、サブファシリテーター、総合ファシリテーター、運営側が守るべきルールも決めなければなりません。

これらの縦軸の要素に対して、先ほどの1番から10番の要件をどのように満たそうとするのか、という設計書になります。これを基にフォーラムの具体的なスケジュールや、グループワークの進め方を決めていったということになります。

今回の感触を言うならば、このようなシステム化をした結果として、我々運営陣も、今なぜこういう行動をしているのか、という目的も明確になり、運営もやりやすくなりました。また、運営側の意図が参加者にもうまく伝わって、参加者の皆さんもその意図に乗ってうまく進めてくださった、と思っています。

第2期のフォーラムが終わった後、さらにこのシステムをブラッシュアップするべく、フォーラム研究会を2回ほど実施しています。今お示ししているこの表は、平成25年度の報告書を作るときに私が1人で作ったものですが、これを今ディスカッションの中でブラッシュアップしているということになります。

(スライド7) 次に、フォーラムの概要ですけれども、先ほどもお話ししていますが、5回のフォーラムを1つのシリーズとして、同じ参加者で実施しています。フォーラムは隔週の土曜日に行われます。

参加者は、市民10名程度、専門家10名程度ということで、今回は9名ずつ選定しています。フォーラム参加者は2つの調査をベースに決めるということで、首都圏住民の調査、原子力学会員の調査から参加者を募り、今回は、首都圏住民に関しては参加者が公募だけでは決められませんでしたので、母集団の意見分布に従って、参加者を追加で募り、意見の分布をチェックしながら参加者を決定したという経緯があります。

内容に関しては、原子力に関するトピックについて話し合いますが、テーマは完全に参加者に決めてもらうというスタイルにしました。話し合いのスタイルは、6名程度のグループワークで、オープンエンドの話し合いをするということ。つまり、結論を出すことを目的としない。お互いに情報を交換してコミュニケーションする、お互いの意見を尊重してコミュニケーションするということがあくまでもフォーラムの目的であるということを徹底しました。

記録に関しては、フォーラムの現場は原則として非公開、また、その場にどのような人がいるのかということも非公開ですが、それ以外は、個人情報等を省いて、全て公開すると

いう状態で実施しています。

(スライド8) フォーラムの実施日とテーマは、スライド8にまとめてあります。

第1回のテーマは、第1期と同じく、『原子カムラ』とはなんだろうか?』にしました。

第2回からは参加者にテーマを決めていただいています。具体的には、第1回フォーラムの最後に、テーマを決めるためのグループワークを実施しました。資料1-8を見ていただくと、第1回フォーラムでは3つのグループワークをやっていますが、グループワーク3で、「フォーラムでは、次回に何を話し合うのかについて、皆さんに決めてもらいます。そこで、次回のテーマについて話し合います」ということで、次回のテーマを決めてもらっています。3つのグループがありますけれども、各グループから2つのテーマ案を出してもらいます。その後すぐに投票して、一番票が多かったものを次回のテーマにする。2つずつ出してもらうので、合計6つのテーマ案が出てくるわけですが、似通ったものが出た場合は、これとこれは似ていますね、一緒にしましょうか、どうしましょうかというのを決めながら、変に票が割れたりするともったいないですので、そういうふうに皆さんと相談しながらやるという方法で、完全に参加者にテーマの決定を委ねたということになります。

その結果、第2回は「市民と専門家が考える壁の違いとは?」というテーマになりました。これは、第1回のテーマの延長で、原子カムラの壁とは何だろうかということ話し合ったことになります。第3回は、「壁を越えるために何をどう伝えるべきなのか? 市民がわかりやすい原子力情報とは?」、第4回は、「原発は本当に必要なものなのか? 原子力発電所なしで電力は『本当に』足りるのか?」というテーマが選定されたということで、原子力の話にどんどん集約していくという展開をしていきました。

こちらとしては、もっと自由な展開をするのではないかと期待していたところもありました。参加者にお任せして、いろいろなことを話していくことによって、専門家と市民との間のギャップが、言うほどないのだなということ認識する、みたいなプロセスがほしいと思っていたところもありました。原子力の話で進んでいくと、何が起こるかということ、専門家は専門家に、市民は市民になって、市民は専門家の言うことを聞き、専門家は市民に教えるという立場になっていくのです。確かに、お互いに尊重するのですが、それはコミュニケーション上の尊重だったり、市民に対して専門家が寄り添うというような尊重のやり方であって、本当に対等な立場として尊重するという感じではなくなってしまう。それが今回起こったことでした。

ですので、第5回は事務局でテーマを決めさせてもらいました。専門家が専門家ではない話題でやろうということで、いくつかのテーマを第4回の最後にこちらで提示して、その中から投票してもらいました。専門家が専門家でないような枠組みで話し合ったらどうなるのだろうか、ということで、ある意味で実験的な回だったと言えます。でも、その結果、原子力と大きく離れたテーマではなく、「地球温暖化と私たちの暮らしの関わりとは?」というテーマが選ばれて、結論を言うならば、原子力専門家は地球温暖化の話であっても

専門家として振る舞うということがよく分かった、ということになります。これが「食品」くらい違うテーマになれば、「これは私の専門ではない」ということで、また違ったのかもしれないのですけれども。私も、そうなることを防ぐために、今回は皆が市民です、専門家も1人の市民として話し合ってくださいね、と念を押したのですけれども、全然そうならなかったというのが、ひとつの面白い振る舞いだったなと思っています。

(安部) 前回の会合のときに、今回は専門家の中にいわゆる反原発の方も入れた、という話をされていましたが、原発推進・反対に関わらず、やはり専門家は市民に教える、あるいは上から目線になってしまうのですか？

(木村) 少なくとも、今回はそうなっていました。

ただ、面白かったのは、市民の方は少し変わってきていたのです。市民は、最初は専門家がある意味敵視しているのです。専門家から市民に情報が伝わるものだという構図は最初から最後まで変わらなかったのですが、市民の中で、「ああ、専門家も同じ1人の人間なんだ」ということに気づいた方が出てきた。専門家を異端視しているうちは、市民は、自分以外の市民には目が届かないのです。専門家ばかり見ている。ところが、「専門家も1人の人間なんだ」と気づくと、今度は、市民にも同じだけ目が届くようになるのですね。その結果、市民の中にもいろいろな人がいる、ということによりやく気づく、というような効果が見られました。ただ、専門家が市民に情報を伝えるという構図には変化がなかったということです。

反対派の専門家の方は、「コミュニケーションが目的、というところには賛同しかねる」とおっしゃっていました。自分の主張をいかに皆に伝えるか。できれば皆にもそう変わってほしいと思っている、とおっしゃっていましたので、その方はそういう振る舞いをしていました。

(安部) 防災の分野だと、専門家と称される人たちの「専門知」と、長らくその地域に住んでいる人たちの「ローカル知」、例えば津波がこういう形で来るという知識、があります。防災分野では専門知とローカル知の対話が可能で、また、そうしなければ有効な防災対策は実行できません。

一般的には市民側が持っている知識がローカル知になると思うのですが、原子力分野ではローカル知は成立するのですか？

(木村) 分野によると思います。

例えば防災、津波がどう来る、地震がどうだ、地盤がどうだ、どこから湧水があるか、などの話は、はっきり言ってローカル知がないとできませんし。

あとは、社会的な領域ではローカル知をもっと入れる必要があると思います。市民がど

ういう情報をほしがって、どういう情報が分かりやすいのか、みたいな話をもっと聞かないといけないのですが、今まではあまりうまく対話できていなかったと言えます。

(安部) 防災の場合、ローカル知と専門知は情報の価値が同等です。専門知だけでは本当の防災対策ができない部分がある。優劣がないともいえます。

でも、今のお話だと、原子力分野のローカル知は単なる地場の情報みたいなもので、やはり専門知のほうが優位であるように聞こえたのですけれども。だとすると、専門知とローカル知の対話が成り立つのは難しいかもしれない。医療の世界と似たところがあって、ここで言う市民というのはあくまで受け手側で、ローカル知とまでは言えないのかもしれない。

だとすると、フォーラムの前提条件はいかがなものか、という気がしたのです。

(木村) なるべく専門知とローカル知のギャップの少ない話題を設定していこうという意図はあるのですけれども、参加者がテーマを設定していくと、どんどん専門知優位な話題に進んでしまう傾向はあるようです。

(定松) それは、市民側に、この機会に専門家に聞いてみたい、勉強したい、というようなドライブがかかっているのですか？ 専門家を敵視しつつも。

(木村) そうです。ただ、興味深いのは、専門家が話したいことと、市民が聞きたいことが一致しない、という状況も見えました。

専門知とローカル知が対等かそうでないかというのは、確かに分野によっていろいろ違うのですね。そして、ローカル知をもう少し取り入れるべきだ、という一般論的な話では通用しきれないこともあるのです。

(安部) 対象事象によって、ローカル知の持つ意味合いが大きく異なってくるのだと思います。原子力は、おそらくローカル知の比重が軽いと思うのです。

(松田) 私は、同じ原子力でも分野によって違うのではないかと思います。例えば、廃棄物をどの地域に持っていくかという話の合意形成と、原子力というものに関する市民のイメージを話し合う場とでは、違ってくると思うのです。

(木村) 科学技術的な話になると、どうしてもローカル知より専門知のほうが強くなってくると思うのですけれども、原子力分野は政策決定もかなり大きなウェイトを占めてくるので、ここに関しては、ローカル知という言い方が正しいかどうかは分からないのですけれども、ソーシャルキャピタルと言うのでしょうか、その地域にどんな資本が存在して

いて、どういう関係性があるか、ということ全体を把握していないと政策決定はできないので、ローカル知がかなり効いてくる。だから、今松田先生がおっしゃったような分野は、ローカル知が効いてくる分野ですよ。

ただ、そこに関して、残念ながら原子力業界の人たちは、なんとなく科学的合理性みたいな御旗を立てているだけにすぎないので、よろしくないと思います。

(松田) そうですね。例えば、もんじゅの研究をどうするか、などはローカル知ではなくて、専門知が効いてくる分野ですが、どこに廃棄物の処分場を作るのかを決める、また、それが適正かどうか判断する際には、市民も多くの意見を持っていると思うのです。そのギャップを埋める作業がとても大切で、この研究はそこに貢献できていると思っています。

(定松) 先ほど話に出た、話したいことと聞きたいことの不一致というのは、具体的にはどんな感じでしたか？

(木村) 実はそれを1回テーマにしているのです。資料1-5を見ていただきたいのですが、第3回がそれに当たります。

この回は、宿題をお願いした回でした。専門家には、「市民にこういうことを伝えたい」ということをまとめてきてもらって、市民には、「専門家からこんなことを知りたい」ということを書いてきてもらいました。

例えば、22ページは専門家のバージョンです。左半分に、専門家のまとめた資料が載っています。それに対して、他の16人からいろいろな意見をもらう、という構成でした。赤い付箋は市民からの意見、青い付箋は専門家からの意見です。

そのときに、例えば地震だったら地震で、技術的なことを滔々と話される専門家もいらっやあって、そのための分厚い資料や論文をコピーされていた方もいらっやったのですが、けれども、「そういうことを知りたいわけじゃない」、「難しくてよく分からない」、「だから何なのか、ということが知りたい」というような意見が書かれていたりします。

一方で、例えば25ページは市民バージョンです。「こんなことを知りたい」ということを羅列して書いてくださいということで、伝える方法や、こういうことについて知りたいという具体例などが書かれています。

そして、グループワークの中では、26ページのように、この中で特に市民が知りたいものを1つ出してもらって、それに対して専門家が答え、市民がまた質問して、専門家がまた答え、という繰り返しをしていきました。

また、第4回は、原子力は必要なのか、どうなのかというテーマでした。単に「必要か？」という質問にすると、話が紛糾するだろうと考え、グループワークの進め方も少し工夫しました。まず、皆で必要と思う理由を考える。次に、皆で必要ないと思う理由を考える。そうやって両方の立場に立って考えてみた結果、どういう要素が出てきたのかを整理した

上で、フリーディスカッションをする、という話し合いの進め方をしています。

市民からは、「コストについて知りたい」という意見が数多く出されました。そして、専門家はそれに対してまともに答えられない。地球温暖化には答えられるのに。原子力専門家の意識の中での専門的領域の範囲というのが少し見えてきたと思っています。

市民が欲しい情報と専門家が伝えたい情報のギャップ、それから、専門家が持っていない情報とのギャップが、今回はいろいろ見えてきた、ということになります。少し幅広の答えになりましたけれども。

(松田) その問題は政策にも関わってきますね。国がはっきりしたコスト計算の目安を出していないじゃないですか。だから専門家も答えられないし、市民も不満が募るのだと思います。

(定松) 原子力学会には経済学者はあまりいないのですか？

(木村) 班目先生の前の原子力安全委員長だった鈴木篤之先生は、経済に造詣が深い方でした。最適化問題のプロで、最初は炉の中での物性で最適化問題を解いていたのですけれども、後年は経済性の最適化に取り組んでいました。あとは、今は東京理科大で先生をやっている高嶋君、私の後輩なのですが、彼は原発の経済性を粛々とモデル計算していました。そういう人がいた時期もあるのですけれども、原子力学会の中ではそういう分派がどんどん減っているのは事実です。だから、技術一辺倒の学会になりつつあります。

(安部) 一時増えた時期があるのですか。それはいつ頃ですか？

(木村) 経済が増えたのは、コミュニケーションの少し前ですから、1990年代終わりから2000年にかけてくらいです。

(安部) 原子力学会でもそういう時期があったのですね。それを広げていけば、こんなことにはならなかったかもしれません。

(木村) そうなのです。実は、今のコスト計算の結果は、よく見ると、2000年頃に電中研がやった結果なのです。少し手直ししているだけに過ぎない。その頃は外部性に対してどういうふうに経済価値が変わるのか、みたいな議論もされていたのですけれども、最近ではされている形跡がないですね。

(安部) 電力のコスト計算は、別に経済学の理論的な体系が分からなくても、数学の分かる人だったらできるのです。土台の発想を組み替えるだけです。ですから、それが

必要だと思うかどうか、重要だと思うかどうか、なのです。

(木村) 今回のフォーラムを見ていて思ったのは、重要だと思っていない、自分の領域だと思っていないから、あまり取り組まれないわけですね。

(安部) 固有の狭い技術のことだけを考えていくのが専門家だ、と思っている人が多いので、かなり見直しをしなければならないと思います。

(木村) ただ、「原子力は総合工学である」という自負はあるので、T字型のこちら側も充実しなければいけないということは皆分かっているのです。でも、T字の方向性が、経済や社会ではなくて、地球温暖化とか、そちら側なのです。

(松田) そのほうが楽なのですよ。

(新澤) 今までのお話を聞いていると、参加者に任せていると、どうしても、専門家のご意見拝聴という形になってしまうのではないかと、思いました。せっかく市民9人、専門家9人でやっても、片方は無知、片方は専門家だとしたら、市民側はお話をお聞きしたいとどうしても思いますよ。

だから、ある程度シナリオを持ってコミュニケーション・フィールドを設計しないと、話が発散してしまう、というのが結論になるのかなと。先走って申し訳ないのだけれども。このコミュニケーション・フィールドが目指すところがよく見えないので、こういうコメントをしているのですけれども。

一方で、市民が強い話題もありますよね。危険性はどうか、身のまわりでどういうふうにご利用できるのか。こういう話題ならば、市民もある程度意見を言えるわけです。

私たちは、コンサルタントをするときに、答えを得るためにプランニングセッションというものをやるのです。例えば、経営改革のポイントを絞り込むために、役員を集めて、今、この会社にはこういう問題があるのではないかと、というように誘導するのです。ひとつのシナリオを持ってやらないと、結論が出てこないのです。この会社は、これをすぐにやらなければならない。役員が合意すると、力強く進んでいきますよね。

今までのお話をお聞きしていると、原子カムラの境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの、最終的なシステム化にちゃんとつながるのだろうか、という気がしてしまうのです。どこに持っていこうとしているのかが、よく分からないのです。

(木村) 結論を導くことが最終的な目的だとするならば、そういう議論ができるフィールドを作るまで、がこの研究の目的です。今は、お互いが敵視していて、お互いがお互いしか見えていない状況なので、周りが見えないのです。ちゃんとコミュニケーションをし

ていくことによって、ああ、自分たちの周りはこちらで、自分はこうである、ということが見えるようにならないといけない。今はそれすらできていない状況なので、それをやるというのがポイントです。

だから、本当はこの後に、ではどうやって結論をつけるためのコミュニケーションをしていくか、という研究をやらないといけないのです。

(新澤) それを2年間くらいかけて別途やらないといけないですね。

今までのお話だと、参加者にそのまま議論させているとうまくいかない、という結論になるような気がしているのですが。

(木村) それはその通りです。

(定松) 「専門家はコストの話に答えられない」ということが、今回のフォーラムではっきりと分かったことだと思うのです。ですから、このフィールドをうまく成立させるという議論とは別に、こういうフィールドを作って専門家と市民を対話させてみた結果、一般的にこういう傾向がつかめた、という言い方はできるのではないかと思います。新澤先生がおっしゃることももっともなのですが、結論を置くと、それ自体が不信を招くこともあるから、(あえて)外されているのでしょうから。今回結論を外したことで、話し合いがこういう方向に進むという傾向が見えたということと、経済的のところ(研究)の抜け落ちがはっきり見えたということは、それはそれでひとつの成果と言えるのではないのでしょうか。

(木村) そうですね。ありがとうございます。

(松田) かつて原子力分野に少し関わり、環境分野の中にいた人間として、そして今は市民の立場に戻った人間としては、木村先生しかこういう研究をやっている人はいないのだ、と言いたいです。原子力分野において、膨大な国の予算と雇用と労働力と研究者を抱えていながら、市民が一番望んでいる研究をやっているのは、過去に誰もいなくて、木村先生だけ。だから、非常に苦勞されていることと思います。このプロジェクトには他分野の著名な評価委員の先生方が参加してくださっているので、この研究を次の世代へとつなげていくための研究体制を充実していかないと、日本は本当に危ないなという危機感があります。

私たちが、こういう研究は非常に大事だ、もっと広げなければならない、ということによって、もしかしたら経済の専門家の方が原子力をやりたい、やらなければいけないと思ってくれるかもしれない。

あと、私は本当に驚いたのですけれども、原子力のコスト計算は国もやっていないし、

研究者もやっていないし、電力会社もやっていない。そもそも火力発電所や水力発電所でも、どこからどこまでをコストに含めるのかという議論を誰もやっていないわけで、根拠となるデータがあいまいだと私は思っています。まだそういう世界ですよ。

(木村) 今、別件で社会調査に関わっているのですが、その中に「原子力に関して知りたいことは何ですか？」という項目があって、去年まではその中にコストのことは入っていなかったのです。今年はコストを入れてみました。もし、コストのポイントが高かったら、次年度はコストに関するプロジェクトを立ててみようかなと思っています。

(松田) やりましょうよ。

(木村) コストをしっかりと計算し直して、ちゃんとアカデミックなレベルでやって、そのプロセスも全部公開できる体制でやらないといけないと思うのです。

(松田) 公平でリベラルな方たちの目線で議論して行って、それを公開していく。手間はかかるけど、そういうプロセスを踏まなければならないと思います。原子力は大事なもののだけに。

(土田) 先ほど、安部先生から、「ローカル知」の話と、医療と似ているというご発言がありました。確かに、医療と原子力は似ていると思うのです。そのときに思うのは、民間療法はローカル知にも含まれるけれども、専門知と思っている人もいますよね。

(安部) そうですね。専門知だと思います。

(土田) 原子力の場合も、おそらく民間療法にあたるような知識があると思うのです。先祖代々こういうことをやっていて、あれは命を落とすんだ、みたいな。例えば、怪しげな民間療法を、正規の教育を受けてきた医者が否定するということを、住民はどう捉えるのか、と思ひまして。そして、原子力のやっていることはこれによく似ているなど。

(松田) 似ていますね。

(土田) そう考えていくと、医療におけるローカル知は QOL になるのかなと思います。生活の質として何を求めるのか。命を永らえることがすべてではない、というような。それは患者に聞かないと分かりませんよね。原子力も、同じような形で知識を持ってこないといけない。フォーラムの落としどころはそういうところになるのかなと思ったのですが、それでも。

(木村) それはありますね。フォーラムのシステム化もひとつの成果ではありますがけれども、やはりこれだけ大掛かりなことをやってきたので、そこから分かってくるいくつかのポイントは整理しておかないといけないですから。

(松田) 素晴らしいデータベースができたわけだから、これをどうやって料理して、分かりやすく社会と政策とにつなげていくかが求められますね。

(木村) そうですね。そういうところがちゃんと埋まっていかないと、結論を出すようなコミュニケーションはできないと思いますから。

(新澤) 私が申し上げたいのは、結論は出さなくてもいいのだけれども、少なくとも「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行」と銘打っているのだから、お互いが理解し合えるためのコミュニケーション・フィールドである「フォーラム」はどうあらねばならないのか、というものは出さなければいけないのではないか、ということです。どのようなシステムや、議論の順序、テーマが必要なのか。

参加者に任せていると、テーマが、専門家に拝聴するという方向に行くように見える。であるならば、誰かシナリオライター、大所高所から見ている人がいて、お互いが理解し合えるような話題を展開する、という仕方はあると思うのです。これは決して誘導ではないですよ。例えば、経済の議論が欠けているのではないか、というのもそれですよ。テーマの選び方、テーマの公平性もきちんと担保されなければならない。

結論めいたことを言って申し訳ないですが、システム化というならば、それくらいのことは言わないと、よく分からないまま終わってしまった、という印象になりかねないと思うのです。

(木村) 今のお話を聞いて、ご懸念がよく分かりました。確かに、放っておくと拝聴する方向に行くという結果が今回出たわけですね。だから、そうならず、ちゃんと対等な立場で話し合えるような方法を入れこんでおかないといけない。

(松田) その要素としては何があるか、ということですね。

(新澤) そうです。領域としてどんな領域があるかということをよく分かった人が話題を設定していかないと。話題設定は、決して結論の誘導ではありませんから。

(木村) 徹底して参加者に決めてもらおうと、信頼関係はよくできる。だけど、その信頼関係というのは、対等なものではなく、専門家と市民としての信頼関係になっている、と

ということですね。

(新澤) そうです。それでいいのか、という話です。

(松田) その信頼関係では政策は進まないですね。

(木村) だから、対等な信頼関係を作るための工夫を入れておかないといけない、ということですね。

(松田) 今欠けているものは何か、という話を整理すればいいのではないですか。

(新澤) そうですね。専門家としての信頼感は、今でもないことはないのです。原子力学会の人は自分の同僚のほうに閉じこもっているな、と思われてはいますが、専門家だということに対しての疑念は持っていないのです。でも、同じ市民の土俵で本当に考えているのか。我々とは違っているのではないか、という疑念があるのです。

コミュニケーション・フィールドを通じて、それをブレイクスルーするにはどうしたらよいか、というのがこの研究の目的のような気がしているのですけれども。

(松田) 私も同感です。

(木村) 本質的なご指摘だと思います。

(定松) 専門家の方々が専門ではない話題をテーマにする、というのがひとつかもしれません。例えばコストの話。でも、コスト計算の専門家の方がメンバーに入っていたら、それはそれで拝聴になってしまう可能性もあるので、専門家の専門性を見ながらテーマを選ぶということになりますね。経済の方を呼んだときは、技術的なところに関してどう考えるかという話をしてもらい、技術の専門家が来ている場合は、コストの話についてどう思うか、という話を市民とする。

(新澤) 背景の異なる人たちが同じ立場でお互いに理解し合うためにはどうしたらいいか、ということ考えたとき、話題になっている全体の領域があって、それは必ずセグメントに分けられるのです。そして、それらのセグメントを満遍なく議論する必要があります。そうでないと、「なんだ、専門家は、いい格好して、原子力はいいいよ、いいよと言っているだけじゃないか」となってしまうので。専門家といえども、市民の立場で考えているんだ、と最終的に納得できれば、境界を越えているわけでしょう。今のままでは境界を越えられないですよ。

(定松) では、順番に専門家も回しましょうか。技術の専門家を呼んでコストの話をして、次はコストの専門家を呼んで技術の話をする。市民は変わらずで。

(新澤) それは、最初に基調講演的にざっと話してもらって、それで終わりでもいいと思います。その人はグループワークの中に入らなくてもいい。今私が言っているのは例えばの話です。正しいかどうかは分かりません。ただ、システム化をするならば、構成員の選定だけではなくて、境界を越えて理解し合うために、話題を考える人がいて、満遍なく、全域にわたって話し合う必要があるのではないかと、思うのです。

我々はそうするのです。話題は会社全域に渡らないといけない。この人は別のこと、この人は経済のことを話している。話がどちらに行くかという、力が強い人のほうに行ってしまう。だから、「今は経済の話をしているのですよ」というふうにセグメンタイズする必要があります。例えば、「今は原発の危険性のお話をしているのですよ」とか。

話題の選び方も、合意を得るためには、理解し合えるためには、極めて重要なのです。これは経験知ですけれども。

(木村) その点はまだ途上ではありますね。

(新澤) 私もそうだと思います。

ただ、フォーラムの結果からこういうことが言える、というのは、それはそれですごくいいことではあります。

(木村) どちらかといえば参加者にお任せすべき、という風潮が強い中で、お任せすればするほど市民と専門家というレッテルは強くなっているのですよ、という結果が出たわけですからね。

(松田) そうですね。ある意味で、国民のほうにエネルギーを使うことに対する責任感を持たせていかないといけないのですよ。

(土田) 結局、市民のほうは、なんだかんだ言っても、安心して任せられる人がいたら、それで議論は終わるのですね。でも、あなたには任せられない、となるから、軋轢が生じるわけです。

(新澤) そのときに市民が、断片的な話題で一方向的に専門家が我々に教えてきているな、と思うかどうか、が重要です。例えば、原子力の安全性について広く議論しましょうというときに、安全性といってもいろいろな領域があるじゃないですか。話題をセグメンタイ

ズできるのです。少なくとも、フォーラムの設計者がそれをしたほうがいいと私は思っているのです。そして、参加者がそこから話したいテーマを選ぶ。そうすれば、「ああ、偏った話題じゃなくて、私たちが本当に心配していることも話げたな」とか、「我々としても言えることもあるな」という満足感が出てくるでしょう。システム化の際にはその辺りも盛り込まれないと、消化不良になるような気がします。

(土田) 今までのいろいろな話から考えると、市民側は、やはり信頼とか、そういうキーワードで行くと思うのです。ところが、専門家のほうは野放しというか、なんの規制もかかっていなかったわけですね。専門家が、市民が何を考えているのかを知るとか、自分がマッドサイエンティストのように見られないようにするとか、そのためにどうしたらいいか、というような議論は、専門家に対して誰も何も言ってこなかった。ただ勉強すればいいという話だった。そこを気づかせる。だから、私は初めからこのフォーラムというのは、市民ではなくて専門家がどう変わるかという点に意義があると思っています。

(松田) 私もそう思っています。専門家の方々に市民の気持ちをもっと理解していただきたいです。

(木村) ただ、難しいのは、「易しく話さなければ駄目なのか」というレベルの気づきの人が多いのです。それすら気づいていない人もいますので、それは一歩ではあるのですけれども。

そこから先に気づく人は、最初からなんとなく分かっているのです。分かっている、やはりそうかと確認する、という感じなのです。

(松田) それもとても大事だと思います。それしか仲間を作る方法はないですから。

(土田) そうですね。専門家の中で仲間を作るというのは非常に大事だと思います。

(松田) ええ。皆思っているのだけど、誰も言わないから黙って知らないふりをしておこうという世界でそれぞれに動いているので。評価委員の先生方のアドバイスを受けて、木村先生と土田先生でこの研究の成果からこれからの原子力コミュニケーションの方向性を示してくださることが大切だと思います。

(新澤) システム化というからには、原子力ムラだけではなくて、他分野にも使えるようなものを目指すのでしょうか？

(木村) はい。

(新澤) だったら、やはりお互いの理解を深めるためのコーディネーターの役割についても記載が必要でしょう。コーディネーターは、パネリストや構成員の選定はもちろんのことながら、話題を参加者に選ばせるとしても、こういう領域について話してほしい、満遍なく話してほしい、という全体の絵ぐらいは出さないといけない。その中から実際に話すテーマを選ぶのはフォーラムの参加者でもいいのですけれども、全体はこうですよという像を見せる。ただ食い散らかすだけだと、消化不良を起こしてしまうので。そのくらいのことは、結論のひとつとして整理されるのだろうと思っているのですけれども。

(木村) 今回はそこまでは行けないかもしれません。絵を書くことはできると思うのですけれども、その上で「次の実験がさらに望まれる」と言うところまでですね。

(新澤) 今回は、そこまでも十分だと思います。だから、そういったコーディネーションができる人たちを育てることが非常に重要だ、という議論になると思うのです。それでいいのですよ。私はそうあってほしいですね。

(定松) そういう意味では、今回はテーマ案を参加者に書いてもらって、そこから選んでいるわけですから、ある程度の絵はもう持っているわけですよね？

(木村) テーマに関しては持っています。

(定松) その上で伺いたいのですけれども、今回出てきたテーマで、木村先生から見ている、意外とこの辺りが薄かったなとか、あるいは、万遍なく出てきたなとか、その辺はどうでしたか？ 経済が弱かったというのはそのひとつだと思いますが。

(新澤) テーマが非常に抽象的ですよね。だから、十分に発言できなかった人もいると思うのです。

(木村) 第1期フォーラムの問題点として、議論を丸めてしまうということがあったので、今回は、そういうことはしないでくださいと言ったのですけれども、テーマ設定になってくると、精鋭化したテーマはあまり出てこないのですね。グループから2つ出す段階では、「これとこれは似たようなものだから、1つに丸めて書きませんか」という感じで、抽象的なテーマが出てくるが多かったです。

ただ、その前の付箋のレベルでは、結構ズバリと書いてあるものもありました。例えば、「火力」とか。ただ、そこからディスカッションをしていくと、少し丸まったテーマになってしまう、というのはありました。

(定松) 新澤先生がおっしゃるような「絵」を出すときは、尖がったテーマが出ているほうが、選ぶ側としては満足度が高いかもしれないですね。

(土田) テーマを決めるグループワークについても、付箋のまとめがあったほうがいいかもしれません。防災の分野で、慶應の吉川さんがやっている「クロスロード」という本が非常に売れているそうです。その中では、どちらに結論を出してもいいのだけど、そういう問題がある、ということを知り、考えることが防災の担当者に必要なのだとか、市民もそれで防災力が上がることを目指しているのですけれども。原子力に関して、そういう形で、どちらに結論が出てもいいけれども、そういう問題があるということに気づくことが大切なのではないかと思いました。

(新澤) それでもいいですよ。

(土田) システム化というときも、そういった問題のデータベースがあれば、そのデータベースの中から、こういうことを話し合いませんか、みたいな形でシステムを組んでいけるかなと思いました。

(木村) なるほど。私も吉川先生の本を読んだことがあって、そのときは、ああ、こういうリスクコミュニケーションの形もあるのか、くらいの理解でしたけれども、これもひとつのシステム化の形なのですね。

例えば、こういうものの中からこういうふうに話題をピックアップして、今回は話し合いましょう、というような、ゲーム的な要素も入れながらやってみる、というのもひとつですね。その最初の選択肢は、今までの実験をうまく整理して、こちらからお出しする。

(新澤) できるだけ具体的な、フォーラム設計者がやるべき注意事項、クックブックみたいなものまでシステム化の中に入ってくると、非常に有益ですね。

(木村) 今、それを目指しているところです。ルールと具体事例とを書いたブックレットくらいは作りたいと思っていたのですが、作業が煩雑になってしまって、まだルールブックしか作れていないのですけど。

(安部) 現代社会において、施策が導入される、あるいは意思決定をするときに、万人が喜ぶ結果になることはありません。例えば、原発の立地は周辺住民にとっては重大な問題でも、都市住民にとってはそれほど関心がなかったりするように、問題との距離感などによって、物事の捉え方は異なってきます。そういう社会においては、市民として参加す

るときに、いろいろな現実を考慮して、ある部分は不満足だけれども、このレベルで意思決定をしなければいけないという、言ってみれば妥協点を見つける、という思考法がないと、うまくいかないのです。先ほどから話題になっているシステム化とは別の次元に、そのような問題もあるということです。

しかし、どうも日本人はそういう発想が苦手のように、自分の意見は正しい、あの人の意見は間違っている、というような論断をしがちなところがあるのです。例えば、フランスやスウェーデンの原発立地の話を聞いていると、リスクコミュニケーションがされて、十分ではないにせよ、議論の結果ある程度落ち着いているように見えるのです。ところが、日本はそうではなくて、最終的に裁判まで行ってしまう。裁判の結果、今までは国、事業者が勝っていたから、原告側はますます不信感を募らせている、というのがこれまでの流れだと思います。ムラの垣根を越えるという話に加えて、多様な利害関係者の調整と意見交換を通じて、妥協の結果としてある意思決定がされる、という筋道を、日本人でもできるようにするための仕掛けを一方では考えておかなければいけません。

今回のフォーラムの市民の参加者は、その点はどうでしたか？ フォーラムの趣旨としては、議論を通して、参加前とは意見が変わって、あるところに落ち着く、という見通しだったと思うのですが、意見というのは、そう簡単に変わるのでしょうか？

(木村) そう簡単には変わりません。ただ、一方的なイメージの嫌悪感はなくなったと。原発に反対だという意見が変わるわけではないのだけれども、その結論に至るまでの過程が変わった、というお話はありました。今までは反射的に「反対だ」と思っていたのが、ちゃんとその間の筋道ができた。

(安部) なるほど。そうすると、私が今言ったのは次のステップの社会構造になると思うので、今回の取り組みで、そこに到達するための手がかりみたいなものができた、ということでしょうか。

(木村) そう思います。

(安部) まとめられる際には、今回の取り組みで、次のステップの初歩的な段階をクリアすることもできた、というような視点での評価も必要かもしれませんね。

(松田) 私もそう思います。この研究に期待して、新澤先生のようなご意見を言う方々が多くなると、大変なので。この研究はまだ萌芽の段階なので、もっと予算をつけて、他の研究者もどんどん参画できるようにするための整理の仕方が必要だと思います。

質問なのですが、第4回フォーラムのまとめを見ると、コストに関する付箋もかなり多くあります。先ほど、専門家はコストに関しては答えられなかった、というお話が

あったと思いますが。

(木村) 付箋はたくさん書いてあるのですけれども、原発は安いのです、で終わってしまう意見が多いのです。

(新澤) 聞くほうは、それは違うだろうと思っていますからね。市民は、災害や補償のことを考えると、多額のお金がかかっているだろう、と思っています。それに対して、具体的に、こういうふうに計算しています、というところまで言える人がいない。

言える人がいないということが分かった上で、「これからはぜひ取り組まなければいけない」と思っております」と原子力学会の人が言えば、「ああ、私たちと同じ土俵で考えているのだな」となるのだけど、いない、だけで終わってしまうと、「無責任だ」となってしまうわけです。

(松田) 知恵を貸してくださいと言えば、参加してくれると思うのですけれども。

(土田) おそらく、今の話は会計学の領域だと思うのです。会計の専門家はそういうことをやらないですよ。

(新澤) 東京電力の災害補償の計算は、某会計事務所がやっているのです。コンサルタントにできるのだから、難しくはないと思うのです。やればできるのですよ。

(木村) それでは、だいたい時間になりましたので、ディスカッションはここまでにしたいと思います。

最後に一言ずついただきたいと思いますが、その前に報告として、まずは経費の使用状況調査表が 1-10 にありますので、こちらをご覧くださいと思います。では、こちらは神崎さんからお願いします。

(神崎) 一番上の表が総括表で、真ん中はパブリック・アウトリーチが受託しているもの、一番下が再委託で、原子力学会の経費は基本的に協力者の旅費がメインになっています。

パブリック・アウトリーチが受託したものに関しては、人件費は 4 月から 10 月まで、予定通り消化しております。謝金もほぼ予定通りに消化しています。旅費、会議費は、PBNC の参加費だけが予算にはなかったけれども使ってしまったというのがありますけれども、それを除けば順調に消化して、年度内で全て消化する予定になっております。

凸凹もなく、当初の予算通りに消化している状況です。

(木村) ということで、こちらも特に問題なく推移しています、というご報告です。

最後に、シンポジウムについてご説明したいと思います。1-9をご覧ください。先ほど来話題に出ていますけれども、12月20日にシンポジウムを行いたいと考えています。こちらの案は、業務推進全体会で話し合っただけで決定した内容になります。外部評価委員の先生方にも、お時間が合えばぜひ来ていただいて、最後に、外部評価の先生から一言ずついただきましょう、という形でコメントをいただきたいと思っています。旅費はご用意できますので、もし必要であればお申し付けください。

(新澤) 12月20日のシンポジウムは、総括報告みたいな形ですか？

(木村) そういう形になります。

(新澤) 森田先生もそこでパネリストとして出られるということですね。

(木村) はい。そして、パネルディスカッションの最初に森田先生からコメントをいただくかなと思っています。

(定松) 我々はコメントしなくてもいいと思いますけれども。

(松田) 変なコメントをすると、かえって場を崩してしまうので。積み上げてきたものが崩れないように、挨拶だけでいいと思います。

(木村) 分かりました。

### 3. その他

(木村) 以上で本日の議事は終了なのですが、皆さんお集まりですので、次回の日程を決めてしまいたいと思います。

(日程調整：略)

(木村) では、第2回の外部評価委員会は、3月16日の13時から実施したいと思います。よろしくをお願いします。

それでは、最後に、委員の先生から一言ずつ全体の講評をいただいて、終わりにしたいと思います。では、新澤先生から。

(新澤) このプロジェクトは新しい試みだと思いますから、私たちも期待するところが大きいわけです。先ほども申し上げましたが、システム化ということで、ぜひ、他でも使えるようなモデル化をしていただきたいと思います。今、国と市民との間の対話が必要な分野はたくさんあるわけですから、それに使えるようなシステムを設計していただきたいと思います。まあ、設計までは行かないかもしれませんが、何かしらのサジェスションはきっとできると思いますので。

(木村) ありがとうございます。頑張りたいと思います。では、定松先生。

(定松) 言い残した事としては、途中で北村先生や八木先生の研究の話があったと思うのですが、この研究と今までの研究の違いみたいなことを、最後の報告には細かく入れたほうが、この研究の意義が伝えやすくなるのではないかと思います。

そういう意味では、以前、政府が討議型世論調査を実施しましたよね。あのときは、原子力に賛成の専門家と反対の専門家をそれぞれ呼んで話を聞かせる、という形式だったと思います。フォーラムとは形が違うのですが、専門家を呼んでやったというところは共通していますので、比較してみたりすると、立体的に見えてくるかもしれないと思いました。以上です。

(木村) 1年目に、設計の段階でデータは集めていますので、成果が上がってきたところでもう一度というのは意義深いと思います。ありがとうございます。では、松田先生。

(松田) 土田先生のアンケート調査と、フォーラムの現場でのディスカッションとの間にどういう関係が成り立っているのか、非常に興味があるので、それを分かりやすく社会に説明していただければありがたいなと思います。

また、海外へ向けての発信をしていただいていることもありがたいと思います。こういう研究は少ないので、海外の方にとっても参考になると思うので、どんどん海外に出ていただければと思います。木村先生と土田先生のお二人と一緒に出ていくと、話が立体的になると思います。頑張ってください。

(木村) ありがとうございます。では、安部先生。

(安部) 業務の執行状況は計画通り、予定通りですし、それを裏付ける資料も作成されているので、執行過程は問題ないと思います。また、昨年度の成果を論文にまとめられていますので、ここまで非常に順調な仕上がりで、特に改善すべき点はないと思います。

どこにもモデルのない新しい取り組みなので、どういう形でとりまとめをしていくか、

見えにくい部分もありますが、3月の委員会では素晴らしいとりまとめが出てくることを期待しています。頑張ってください。以上です。

(木村) ありがとうございます。

本日の意見交換を通して、私の中でも整理ができてきましたので、今日の話を活かしながら分析をして、頑張って期待に応えられるようなものにしていきたいと思います。引き続きよろしく願いいたします。今日はありがとうございました。

以上